

桜が取持つ地域との絆（福岡市早良区脇山校区）

西部航空方面隊オピニオンリーダー
藤本道雄



その日は朝から消防団の青年たちが真っ赤な消防車を広報車代わりに、青々とした田んぼの間を駆けめぐっていた。青空の中、雲の峰は真っ白に輝き、山々は緑に覆われていた。今日7月31日は脇山小学校開校120周年記念の西部航空音楽隊コンサートがあるのだ。

午後1時、開始の合図の花火が上がると、地域の子どもたちやお年寄りまで小学校の体育館に詰めかけた。

音楽隊は折からの暑さの中、次々に曲を奏でる。小学校の校歌が演奏されると、年配の人にも自然と校歌を口ずさみ、まるで小学校時代に帰ったかのようなようだった。

用意した座席はすぐに一杯になり、子どもたちは体育館の床で体操座り、大人の席も足らずに地域の人たちがイスを運び込んできたが体育館の2階にまで鈴なりの人の笑顔があふれた。

福岡市早良区と言えば、プロ野球のソフトバンクホークスのフランチャイズ球場に続く「シーサイドもち」を思い浮かべる人も多いかも知れない。

人口145万人の福岡市にあってIT企業群や海辺の高級住宅地が売りの地区である。

ところが同じ早良区内でも車で小一時間(こいちじかん)ほど南側へドライブすると、大自然に囲まれた脇山校区にたどり着く。校区の人口は2600人ほどだが、面積は35平方キロで東京千代田区の3倍以上もある。

脇山は昭和3年、先帝陛下即位のおりに大嘗祭の主基斎田にも勅定された。選定の理由に人情に厚い地域だという項がある。

現在、小学校の生徒数は106名。小さな山の学校である。

校区の南側は背振山(1055メートル)で佐賀県との県境になる。

脇山校区で音楽隊が演奏するのは初めて。きっかけは北部九州に甚大な被害をもたらした昨年7月の集中豪雨だった。脇山校区では最南端の板屋地区で土砂崩れがおき、道路を寸断してしまった。

板屋地区は脇山小学校からでも車で40分ほど山を登った所で、区役所からだとも1時間半以上奥地にある。人口は30名ほど、平均年齢も70歳を超す。集落が孤立しかけた時には、随分怖い思いをしたという。

そんなおり、地区の人が桜を植えたいと言っているという話を聞いた。ただ板屋地区では人が出て行ってしまい権利関係が複雑で桜を植える民地がない。道路も管轄等の問題で簡単には植えさせてくれないとの事であった。

なんとかならないかと考えていたときに、貝原益軒が書いた筑前国続風土記に「板屋村から背振山上宮までの間の谷に山桜が群生しており、春の頃望み見れば甚だ美しい」と言う記述を見つけた。

背振山には、航空自衛隊背振山分屯基地があり180名もの隊員がいる。基地に通じる防衛道路は、脇山校区、板屋地区を起点としている。

この基地は戦後の占領下、米軍が朝鮮半島を睨むレーダーを据えたことに始まったと聞いている。

レーダーは背振山頂を利用して設置されており、朝鮮半島を望めるように山頂の北側、すなわち福岡市側にある。一方、部隊の管理業務は狭い尾根の南側、すなわち佐賀県側に立地している。背振山分屯基地の皆さんの名刺に書かれているのは佐賀県の地名。結果的にレーダーや防衛道路が福岡市側にありながら、脇山校区の人も分屯基地の皆さんも50年以上の間ほとんどお付き合いがなかった。

そこで脇山校区の自治会長さんに、自衛隊の防衛道路に桜を植えてみませんかと申し上げると、「今まで全く気が付きませんでした。災害が起こったときにも自衛隊と仲良くなれば地域としては本当に頼もしい。今年は小学校の創立120周年と言う記念の年でもあるので校長先生にも相談しましょう。」との答えだった。

本年2月始め、オピニオンリーダーの新田原基地研修のおりに西部航空方面隊司令官の小野田空将にこの話をすると「良い話じゃないですか、支援しますよ。」とのお言葉を頂いた。3月28日には、西部航空警戒管制団司令の吉岡空将補に出席頂き、吉田福岡市長や市議会議員も多数出席し、航空自衛隊背振山分屯基地の隊員43名とともに、105本の山桜の苗木を植樹した。当日は、植樹をした校区の住民が皆で背振山の基地を訪問し交流会も行われた。その後、分屯基地司令の吉武一佐や基地の隊員皆さんとの交流も始まっている。

コンサートが終わった体育館では、分屯基地の隊員と小学生がフットサルの試合を行い交流。西部航空音楽隊の隊員は、学校の七夕飾りに願い事を書いてくれた。

校庭では夕方から始まる地区の夏祭りまでの間に分屯基地隊員によるそうめん流しも行われ、地元住民と基地との絆は本当に深くなった。

誰かが、「まるで短編映画のシーンを見ているようですね」とささやくのが聞こえた。

10年後、小学校の130周年頃には、防衛道路に立派な桜並木が出来ているはずである。卒業生の中には航空自衛隊に在籍する者も出るのだろうか。

ちなみに脇山小学校の校章もよくみれば桜であった。

(航空自衛隊機関誌「翼」雁渡号No.92 掲載)

